日本多施設共同コーホート(J-MICC)研究
平成24年度 第1回 外部評価委員会 議事録

日時:平成25年2月4日(月) 14時30分～16時30分
場所:名古屋大学医学部 中央診療棟3階 会議室
出席者(敬称略):
富永祐民(委員長)、飯沼雅朗、三木健二、森際康友、佐尾重久(以上、委員)
田中英夫(主任研究者)、浜島信之、若井建志、内藤真理子、菱田朝陽、
森田えみ、銀光、川合紗世、岡田理恵子、東端孝博、須磨紫乃、福田奈菜、
杉本裕香(以上、中央事務局) 計 18名
欠席者:齋藤英彦(委員)

1. 平成23年度第1回 外部評価委員会の議事録の確認
主任研究者より、前回の委員会の議事録について説明がなされ承認された。

2. ベースライン調査、第二次調査の進捗状況
中央事務局(銀光)より、ベースライン調査の進捗状況について、2つのJ-MICC連合コーホート(九州大学)を加えた研究参加者数は、2012年10月時点で、92,800人となった。さらにJ-MICCとの連携研究の2コーホート(山形大学GCOEおよび鶴岡メタボロームコホート)の研究参加者は、2012年12月までに、合わせて17,000人となっていることが報告された。また第二次調査が開始されている地区の参加率は約6割で、約14,000人、連合を合わせると約25,000人の参加が得られていることが報告された。委員より現在までの参加者数の推移や目標数に対する達成率のグラフ、および前回、委員より求められた外部評価委員会の位置づけを示す図(J-MICC研究組織図)や研究全体の長期計画の表が追加され、分かりやすくなったとの評価が述べられた。また委員より、連合と連携の相違、第二次調査の参加率が約6割程度であることの影響についての質問があり、主任研究者、中央事務局(若井)から説明がなされた。

3. 倫理審査の実施状況について
主任研究者より、研究全体の変更については愛知県がんセンターの倫理審査を、中央事務局に関することは名古屋大学の倫理審査を受けていることが説明された。一部の地区でベースライン調査の1年間の延長(それにより約5,000人の参加者増加が見込まれる)などについても承認を得られたことが報告された。前回、委員より名古屋大学と愛知県がんセンターでの倫理委員会の構成などに差異はあるかとの質問があったことに対し、中央事務局(若井)より大きな差異はないと回答された。

4. 各種委員会の開催状況、サイトビジットの実施状況

主任研究者より、平成 24 年度は通常開催の委員会に加え、追跡調査ワーキンググループ会議を開催したこと、また第二次調査を開始した静岡地区にモニタリング委員によるサイトビジットを行ったことが報告された。

5. 個別共同研究の促進について

主任研究者より、個別共同研究の促進について以下のように説明された。J-MICC 研究は文部科学省科学研究費補助金　新学術領域「がん研究分野の特性等を踏まえた支援活動」から研究助成を受けており、その課題の一つとして国内でがんの公的研究費の助成を受けている外部の研究者に対する研究支援を行うことの重要性が増している。そこで J-MICC 研究活動で得られた生体試料の一部を外部研究者に提供することで研究を支援する体制を整えることとなった。具体的には中央事務局に共同研究促進委員会を立ち上げ、外部研究者より共同研究応募を受け、その共同研究に適合する J-MICC 内研究サイトを選定し（マッチング）、その後共同研究希望者とマッチング候補サイト間で共同研究に向けての協議を進める形とする。昨年 12 月に、文科省「がん支援ネットワーク」のメーリングリストでこの企画を案内した。また、今年の1月 11 日にはJ-MICC のホームページでもこの案内と、共同研究申し込みの手続きを公開した。その結果、現在までに4件の申請がなされた。これについて委員より、外部に生体試料を提供することで将来必要な試料が不足する事態を防ぐため、また公平性を期すため、中央事務局がコントロールしていく必要があると述べられた。また委員より共同研究実施まで持っていくことのできた事例を選んで、申請から共同研究実施までの具体的な事例として説明に使用することが提案された。

6. 鶴岡メタボロームコホートとの連携について

主任研究者より、慶応義塾大学医学部衛生学公衆衛生学講座が平成 24 年 4 月より実施している鶴岡メタボロームコホート研究と平成 24 年 8 月に連携し、調査票などの研究計画・手順を可能な限り J-MICC 研究と共通化し、将来の共同研究を容易にする基盤を整備していることが報告された。前回、委員より自治医科大学のコーホートとの連携の可能性について質問されたことに対し、同コーホートがゲノムを扱っていないため連携する利点が少ないことが中央事務局（若井）より説明された。

7. 追跡調査について

主任研究者より、平成 24 年 9 月に追跡調査ワーキンググループを開催し、各地区での死亡、転出、がん罹患の調査方法について報告、検討されたことが報告された。前回、委員よりがん罹患の把握の精度を上げるために努力すべきであること、レセプト情報の活用の可能性について意見が示されたことを受け、同ワーキンググループで、とく

に様々な方法が考えられるがん罹患情報の入手方法について協議、情報共有化が行われたことが報告された。

8. 横断研究の進捗状況

中央事務局(浜島)より、横断研究についての進捗状況が報告された。平成 20 年度に 4,519 人に対し 108 の遺伝子多型を測定し、現在 41 のテーマが承認され、うち 7 編の原著論文が受理されていること、さらに 357 の遺伝子多型の解析が終わっており、現在 22 のテーマが承認され、うち 2 編の原著論文が受理されていることが報告された。生体試料の測定については、血漿約 3,000 人分で葉酸、ビタミン B12、総ホモシステインを、閉経後女性の血清約 800 人分を用いて性ホルモン測定を終了しており、前回からの追加はないことが報告された。前回に委員より出された、研究成果が出るのはいつ頃かとの質問に対し、主任研究者より、昨年頃から予想通り論文発表の数が増えてきていることが報告された。

9. 学会・論文発表状況について

中央事務局(川合)より、欧文の原著論文は J-MICC 研究で 12 編、うち横断研究で 10 編、共同研究で 1 編、独自研究で 20 編、合計 33 編が発表されていること、学会発表は 145 になることが報告された。前回、委員より学会発表にとどまらず論文化していくためにサポート体制を組むことを求められたことに対し、主任研究者より、採用までの時間を短縮していけるように投稿から採用までの査読者とのやり取りの過程の情報をメール等で共有化していきたいとの回答がなされた。委員より、参考になる人の講演を開き、論文化するための方法論を学ぶことも視野に入れる必要があるとの意見が出された。

10. J-MICC ホームページについて

中央事務局(内藤)より、ホームページの改訂をおこない、「生体試料を用いた研究支援」のバナーを設けたこと、J-MICC Plus に公表された論文の要旨を発表していること、J-MICC 通信に主に第二次調査を行っている地区の研究者による説明がなされていることが報告された。委員より論文発表された内容だけでなく、学会発表された中からも一般の人が興味を持つ内容のものを選んで掲載すること、また主任研究者の1年を振り返っての挨拶なども掲載することを考慮に入れてはどうかとの意見が出された。

11. その他

主任研究者より、現在の外部評価委員会規則では、委員は「複数名以上の人選を別団体に依頼」することが規定されているが、研究開始後 7 年を経過し、研究の枠組みは決まって追跡調査を行っていく段階に入っており、当初の研究を透明化する目的

はほぼ達成できたことを受け、「1名以上の人選を別団体に依頼」に変更することが提案された。これに対し委員間で討議が行われ、全委員 6 名中、出席 4 名の委員（1 名早退、1 名欠席）の同意を得て可決された。